

近年のインドの歴史教科書の記述をめぐって—2つの政権下での異なる歴史像
東洋大学東洋学研究所客員研究員 澤田彰宏
はじめに

インドにおける歴史教育・教科書問題 2002-04年 インド人民党 (BJP) を中心とした
連立政権 (国民民主連合、NDA 下で、ヒンドゥー・ナショナリズム的視点からの国立機
関作成出版の歴史教科書への書き換え介入、および新しい教科書の出版。その後、会
議派政権での新たな教科書の出版という問題

本発表の目的

① 2つの政権下での歴史教科書の内容はどう違うのか？

② インドの歴史・社会・宗教観は？

I 歴史教科書問題の背景と経緯¹

1998年 第12回総選挙 BJP を中心に13党からなる連立政権樹立、核実験

1999年・第13回総選挙 BJP 勝利、NDA 政権樹立

- ・インド歴史研究評議会とインド社会科学評議会の議長に BJP と関係の深い
人物 (M.L.ソーンディーと B.R.クローヴァー) が就任

2000年・近代史資料シリーズ『自由に向かって (Towards Freedom)』の2巻分 (1940年
と46年) が出版停止

- ・国立教育研究訓練評議会 (NCERT) ² の中等教育用歴史教科書4冊への介入 (牛
食やカーストの展開などについての記述、著者に無断での削除)
- ・国家カリキュラム (National Curriculum Framework for School Education,
NCFSE) を発表、「インド人の誇りを生み育てる」「ナショナル・アイデンティテ
ィと統合を強化」、宗教を中心とした「価値教育」

2001年 アーリア人の牛食を指摘した D.N.ジャーの *Holy Cow* の発禁処分が、
ハイデラバード高裁にて判決³、著者も脅迫を受ける

2002年・グジャラートの列車事故をきっかけにムスリムの虐殺拡大
・新たな中等教育用社会科学 (歴史その他の複合教科書) 教科書の出版
・この間、NCERT の所長以下の人事も、この動きに同調して行われた

2004年 第14回総選挙で BJP が敗れ会議派中心の政権に移り、この問題は収束
ここまでの過程でインドの歴史家からの反論多数⁴

2005年・国家カリキュラム (National Curriculum Framework 2005) 発表
・書き換え介入以前の歴史教科書を再発行

2006年～ 新しい教科書 (現行版) が作成・出版される

¹ 年表作成には以下に挙げる諸先行研究を参照した。

² 正式名称は National Council of Educational Research and Training で1961年設立。人的資源開発省
(MHRD) の下部機関で、学校制度やカリキュラム、教科書の作成、教師の訓練などインドの教育全体に
関わる。

³ その後、2004年にロンドンで、2009年にはインドで再出版される

⁴ 例えば [Habib 2003] では、3冊の歴史教科書で問題とする何百もの箇所について、それぞれ指摘をし、
その反証を挙げている。これに対しては NCERT 側からも反論書が出された。

先行研究

・栗屋利江 歴史教科書出版までの経緯と記述内容 (第6、7、9、11、12学年) の検討。
J.ミルなどオリエンタリストの歴史観との相似、インドの歴史認識における「神話や信仰」
の位置への指摘、[栗屋2004]。部分的ではあっても「歴史=神話」が支持を得るインドの
歴史認識の独自性 [栗屋2010: 187-89]

・内藤雅雄 教科書出版まで (特に ICHR など学界への攻撃) の経緯と記述内容 (第9、
11学年) の検討 [内藤2004]

・M.ラール 教科書問題は90年代以降のインド経済の発展とそのグローバル化に対する
政治と社会のローカル化および (ヒンドゥー) 原理主義化の一環⁵ [Lall 2009]。

・R.ターバル

彼らの主張する歴史を the Hindutva version of history と呼び、サング・パリワールの歴
史観は多様な歴史解釈を、特定のイデオロギーのための、単一のものに置き換えようとし
ている、19世紀の植民地下の歴史のリバイバル版と述べる。

J.ミル『英領インド史』(1817年)以来の「ヒンドゥー文明、ムスリム文明、イギリス期」
時代区分⁶→Hindutva Version では「黄金時代、暗黒時代、比較的中立」。また「ヒンドゥ
ー」「ムスリム」を1つの均一で、宗教的差異を原因とした常に敵対するコミュニティと
した⁷。

V.D.サーヴァルカル⁸は、インド人であるための 'pitribhumi' (先祖の地) と 'punyabhumi'
(宗教の起源の地) は英領インドの範囲内とした→ムスリム、キリスト教徒、パールスイ
ーは除外、共産主義者も同様。

M.S.ゴールワルカル⁹は、非ヒンドゥーは市民でないとした。ヴェーダの宗教に根を持つ
一つのヒンドゥー社会があり、ムスリムはそれを破壊しようとしたのだから殲滅されるべ
き。仏教やジャイナ教の存在、ヒンドゥー自体の多様性は無視。

BJP 教科書でも二民族=国民論の仮定は通用している [Thapar 2007: 193-97]

II インドの教育制度と教科書

・インドでは教育行政は中央政府と州政府の分担事項、基本的には各州がそれぞれ教育行
政を担うが、近年は中央政府にその比重が傾きつつある学制は5+3+2+2制 (全12学年)、
この後に大学等の高等教育、義務教育は最初の8年間。

・インド憲法第28条で国庫により運営される機関での宗教教育が禁止¹⁰、そのため国立機

⁵ ラールは、インドのような歴史修正的な動きは、現在スペインと日本でも同様にみられるものであると
も指摘している。

⁶ ミルはそれぞれを「停滞、わずかに良い、進化の媒介者」とする。

⁷ E.ドーソン *History of India as Told by Her Own Historians* (19c 後半出版) を書いた際、ム
スリムの年代記や作家の書いたものを使用、イスラームの到来以前の歴史はない、これがムスリ
ムはみな「外国人」であるとの理解を再強化→Hindutva Version に反映

⁸ *Who Is a Hindu?* (1923年) でヒンドゥーヴァ思想を提唱した。(1883-1966)

⁹ サング・パリワールの中心組織である RSS (民族奉仕団) の2代目総裁。(1906-73)

¹⁰ 一方、各宗派・団体には自らの教育機関を設立する自由も認められている (第30条)。

関である NCERT 教科書には宗教教科書、道徳教科書は無い。

・学校教科書には国家検定制度が無い、NCERT と州政府さらに民間出版社などから多数出版 NCERT 教科書は大学進学に関して大きな影響力を持っているため、他の教科書に対しても記述内容や水準の点でも同様に影響力があるといえる¹¹。

・他の NCERT 教科書には、現行版ではヒンディー語やウルドゥー語、サンスクリット語、英語などの言語科目や、社会科学、数学、科学などがある。

Ⅲ 参照教科書と検討事項について

1 参照教科書について

・2つの時期とも歴史教科書は中等教育用を参照

・BJP 政権時の *India and the World* (第6と7学年)、*Contemporary India* (第9学年)で、以下ではこの3冊を旧教科書=A と表記する。これらは中等教育段階では地理や政治経済などの科目と一緒にあった社会科学教科書

・現行の教科書は4冊 *Our Pasts* (第6、7、8学年用で8学年は2分冊)で、これらを新教科書=B と表記する。なお本文引用後の括弧内の数字はそのページ数を示す

・A、Bとも3学年がそれぞれ古代、中世、近現代の各時代に対応させているとみられる
・それぞれの教科書記述スタイル、Aは政治史中心の通史的記述。Bは章毎にテーマを設ける方法(そのため各章で年代が多少前後しているところも)

2 検討対象の事項

2-1 古代史 ①アーリヤ人の位置づけ(侵入・進出・土着)、②現代のヒンドゥー教伝統の起源を古代に求めているか、③ヴェーダの宗教(またはヒンドゥー教)と仏教、ジャイナ教の関係

2-2 中世 ①イスラーム勢力について(侵入者・破壊者かそれ以外の捉え方)、②カースト、③パルダールとサティールについて

2-3 近現代 ①民族運動・分離独立でのヒンドゥーやムスリムの役割、②ガンディーの暗殺、③カースト、女性差別、社会改革運動、地域主義について

2-4 歴史観

古代—中世—近代をどう価値付けるか

Ⅳ 古代史教科書 (*India and the World* 第6学年と *Our Pasts* 第6学年)

①と②

A: インダス文明を、「インド文明は8000年前の新石器時代から」(58)、「インダス=サラスワティー文明としても知られ…BC4600年ごろに発展を始める」(80)、インダス文明は「世界最大の文明…エジプト文明の20倍、エジプトとメソポタミアを併せた12倍の規模」(80)、と非常に古い起源と大規模さであるとする。

馬については、「馬の存在もまたテラコッタの立像と骨が示している」(83)(アーリヤ人)遺跡の発掘品図で、一般的には神官王とされている像を「ヨーギー」とし、発掘された

「シヴァ・リンガ」の写真(83)、「人々はまた現在と同様にリンガの形のシヴァを礼拝していた」(84)

「ヨーガの姿勢で座り動物に囲まれている神格の印章は、別名がシヴァ神であるパシュパティ神と同定されている」(85-86)

B: 「インダスの最初の町(4700年前)」(10)、「ハラッパー文明は4700年前に発展」(32)、Aでの「ヨーギー」は(神官王ではなく)「重要な人物」とだけ(36)。リンガやパシュパティ神の図は載せていない。地図でインダス文明の範囲を示し、現在のインダス河流域と西インドのグジャラート地方のみがインダス文明の展開した範囲としている(33)。

アーリヤ人については直接的な記述はない、「リグ・ヴェーダを作った人々が自らを「アーリヤ」、対抗勢力を「ダーサまたはダーシュ」と呼んだ。彼らは供儀を行わない人々で、そしておそらく異なる言語を話していた」(47)とし、どちらが先住民族であるかは明言をしていない、当時アーリヤ人以外の人々も異なる社会集団をつくっていたこととは示す

③ヴェーダの宗教、カースト、仏教・ジャイナ教

A: 牛について、「動物の中で牛は最も重要で聖なる位置を与えられていた。牛を傷つけ殺すことはヴェーダ期には禁止され…ヴェーダには牛を傷つけ殺すことに対しては王国からの追放か死刑により罰せられるとある」(89)

カーストについて、「リグ・ヴェーダ社会は主に4つのヴァルナから構成されていた」(90)、「(ヴァルナの)分類は人々の生まれでなく世俗的な職業に基づく」(90)

宗教については、「ウパニシャッドはどの宗教よりも最も深遠な哲学的著作」(91)(ブラフマンとアートマンというこの思想の根幹には全く触れず)

仏教とジャイナ教について、「ブッダはジャーティ制を厳しく批判した」(96)(この文脈ではジャーティは家系に基づく区分とされる)、興起した理由は「儀礼と供儀から知的救済の方に人々が向いていった」から(96)としていて、(一般的な)ヴェーダの宗教の思想や担い手などへの批判からではない。

「主要な諸宗教」の章ではヒンドゥー、ジャイナ、仏教、ユダヤ、ゾロアスター、キリストの諸宗教を解説しているが、ここにはイスラームがない(133-139)。

B: カーストについて「司祭が人々をヴァルナという4つのグループに分けた…彼らによればそれぞれのヴァルナは異なる職務をもつ(a different set of functions)」(55)、さらに「司祭は一部の人々を「不可触民」として…彼らとの接触はケガレ(polluting)とした」(56)

仏教とジャイナ教のバラモン教批判については記述が無く、個々の展開を記述するのみウパニシャッド思想についてはAとは逆に、思想を説明(ブラフマンとアートマン)(67)しているが、この思想と他思想との優劣的な価値付けはしていない。

Ⅴ 中世史教科書 (*India and the World* 第7学年と *Our Pasts* 第7学年)

①イスラーム勢力のインド到来

A: ムスリムの到来について、「(ヒンドゥーのラージプートたちが)ムスリムの侵略(invasion)に対し個々でも連帯してでも防ぐことができなかった」(96)、「トルコ人の侵略」(節タイトル)、「これらの侵略者の最初はガズニーのマフムードだった」(ともに97)、「それぞれの軍事行動で、彼は宗教的優位を主張するために寺院の富を略奪し、寺院を破

¹¹ ただし、教科書のシェアや部数は未発表のため不明である。

壊し、神像を破壊した」(98) ムスリムは侵略者・破壊者と明確に位置づけ¹²。

ムガル帝国皇帝バーブルによるアヨーディヤーのラーム寺院破壊や同地でのモスク建設に関する記述は無い。

B: イスラーム勢力について「侵略」という語は使わず、「この時期はまた新しい宗教が亜大陸に出現した (appeared) ときでもある」(12) としている。

マフムードについては、「富への戦い (Warfare for Wealth)」(21) という節で、彼は寺院を破壊し富を持つ寺院から財産等を略奪したが、そのような行為は当時の支配者では一般的であったとして、「そのために、彼らは他の王国を攻撃し、しばしば寺院を標的にした」と、彼だけがあるいはイスラームが略奪者・破壊者ではなかったことを説明している¹³。

バーブルとアヨーディヤーのモスク建設についての記述は A と同様無い。

②カースト

A: カーストについては、「前学年で学習したように、社会は 4 つのヴァルナで成り立っている。これらのヴァルナはさらにいくつものジャーティに分かれていた」(99) としていて、この文脈では分かれた時期がいつなのかは不明。

B: 「中世の社会変動の中で社会がより分化すると、人々がジャーティつまりサブ・カーストにグループ化され、そして彼らの背景と職業に基づき序列化された」(8) と、ジャーティの成立はこの時代で、職業別の社会的区分であることが示される。

③パルダール (成人女性の自由行動・対人接触規制)、サティー (寡婦殉死)

A: 以前は恋愛結婚や再婚が許され、女性に財産の相続権もあったが、「ムスリムとの接触によりパルダールが始まった。サティーの慣習も女性が侵略者の手に落ちることから守るためにより一般的に行われるようになった」(99) と、古代は自由な社会であったかの記述

B: ここではパルダール、サティーについてはともに言及はされない (ただし、次の近現代教科書では改革運動が触れられる)。

VI 近現代史教科書 (Contemporary India 第 9 学年と Our Pasts Part1&2 第 8 学年)

①民族運動、印パ分離独立

A: この教科書におけるヒンドゥー至上的傾向について「20 世紀初頭のインド民族主義が「文化的民族主義」(Cultural Nationalism 引用者) と表現されるが…RSS などヒンドゥー至上主義者が用いてきたもので…この話は正しくないだろう」[内藤 2004: 17]。

1928 年にインド・ムスリム連盟が「インドの分割と、別個のムスリム国家での成立以外に無い途を選択」(40-41)、1939 年の 12 月の会議派の諸州政府からの辞職を「解放の日」

¹² だが、次のような記述もあり、単にムスリムは野蛮なだけの戦闘民族だとしているわけでもない。ソームナート寺院を破壊したために「インドではマフムードは都市と寺院破壊の原因だが、彼自身の国ではモスク、図書館そして他の建築で知られている」(98)、アクバルは諸宗教と対話を持ち、「真理の独占を主張できる宗教は無いと結論した」や「万民の平和」(142) などを記す。

¹³ A と同様、この教科書でもアクバルの宗教融和政策を強調している。例えば、諸宗教との対話から「儀礼とドグマを強調する宗教者はしばしば偏狭である。彼らの教えは従うものたちの間に分裂と不和を生み出す」「万民の平和」(54-55)。

としてインド共産党とムスリムが祝った (アンベードカルらも同様であったことには触れず)、1942 年の「クイット・インディア」運動にムスリム連盟は参加しなかった (RSS やヒンドゥー大連合¹⁴には触れず) など、ムスリム連盟を分離主義者とする筆致である。

暴力を伴ったテロリストを明らかに英雄視。多くの「革命志士 (revolutionary)」に言及し、第 1 次大戦ころまでのテロリストの活動について、「この運動は独立には失敗したが、闘争にはかなり貢献した」(31)。有名なテロリストであるバガット・シンらについては「彼らは…2 つの爆弾を投げ込み祖国を興奮させた…最も重要な点は、彼らは逃亡しようとせず、自ら逮捕されたこと」(40)、というように英雄的行為として称える表現。

B: 独立運動の過程でのムスリム連盟についての記述は、要約すると次のような流れである。1920-30 年代にヒンドゥー・ムスリム間の緊張があり、30 年代に連盟はムスリムをヒンドゥーとは別の「ネイション」とみなし始め、37 年の州選挙でムスリムはインドにおいてマイノリティであるとの危機感を持ち、連盟は自らを唯一のムスリムの代弁者との主張をするようになる。しかし、ムスリムからも広範に支持を受ける会議派はこれを受け入れず、46 年 3 月のイギリスによる統一連邦案 (ムスリム多住国家を設ける) には会議派、ムスリム連盟ともに非合意で、このような経緯を経て印パの分離独立に至ったことが説明されている。ここからは、「分離主義者ムスリム」という論はなく、あくまで政治的な駆け引きの中でパキスタン建国を選択したと読める (二民族=国民論は認めている)。

テロリストについては、わずかに 1 か所コラムでバガット・シンにのみ言及しているが、そこには英雄視するような記述はなく「裁判を受け、23 歳で処刑された」(152)。

②ガンディー暗殺

A: 「社会における平和と協調をもたらすためのガンディー・ジーの努力は突然悲劇的な終わりを迎えた。1948 年 1 月 30 日にナトゥラーム・ゴードセーによる暗殺のために」(57) と暗殺の事実には言及。しかし、この教科書の初版ではガンディーの暗殺には全く触れられず、再版でこの記述が挿入されたという [栗屋 2004: 7]。(ゴードセーが RSS やヒンドゥー大連合と関係があったからか)

B: 「1948 年 1 月 30 日にマハートマー・ガンディーは狂信者 (a fanatic) ナトゥラーム・ゴードセーに暗殺された。なぜならゴードセーはガンディー・ジーのヒンドゥーとムスリムは協調して生きるべきだという信念に同意しなかったからである」(150)。ここでは「狂信者」と批判はしているが、暗殺の理由のみで、A と同様、彼の RSS やヒンドゥー大連合とのつながりには触れていない。

③カースト、女性差別、社会改革運動、地域主義

A: ここでは、近現代のダリトや地域主義の運動については触れていない。アンベードカルについては 1930 年代初頭のイギリスによるコミューナル裁定をめぐって (44)、憲法制定委員会議長 (71,74) であることにのみ言及。ガンディーとの論争や、マハール・カーストでの仏教集団改宗などヒンドゥー教批判をした社会改革者の面には触れず、政治家として。

¹⁴ 1913 年結成のインドの政党、ヒンドゥー至上主義的イデオロギーを持つ。RSS の結成に思想的な根拠を与えた V.D.サーヴァルカルは、1937 年から 48 年までこの党の総裁だった。

反北インド中心主義を唱えた南インドの非バラモン運動についても言及が無い。

インドが独立するまでのイギリスとの戦いの歴史のみが主題である。

B:ここでは、幼児婚、一夫多妻（ヒンドゥー、ムスリムともに）、サティー、女性の教育からの排除についてそれぞれ言及。「国の大部分で女性が教育を受けると寡婦になると信じられていた」（108）など。

カーストによる社会の分断、ダリトに対する差別に対しては、「西インドの偉大なダリトのリーダー、B.R.アンベードカル博士と南インドの E.V.ラマスワミ・ナーイカル」の寺院入場運動と非バラモン運動を紹介（118-19）。社会改革運動はブランモ協会、ラーマクリシュナ・ミッション、アリーガル運動、スィン・サバー運動などをコラムで紹介。

AB の共通点—アーリヤ人の進出（侵入）、アヨーディヤーのバーブルのモスク、ゴードセーの思想の背景などは両教科書とも言及が無いが、アクバル帝の宗教間融和的な姿勢は評価をしている。二民族＝国民論について評価は違うものの言及している。

おわりに

A は政治史中心の通史、B は各テーマ別にまとめた章立てであった。B は A に比べ情報量は少ない。B は直線的な通史的叙述をしないことで、各章で取り上げるべきテーマを明確にし、A よりそれぞれのテーマについてより多面的な説明が可能に。B は *Our Past*s という書名や「過去はそれぞれのグループにより異なるという事実」（第6学年6頁）、「すべての階級とグループが同じ方法で変化を経験したわけではない。だからこの教科書は複数形で *Our Past*s となっている」（第8学年4頁）など、インド文化は様々な民族、宗教、社会の複合文化であるという視点を示す。

また、B は、A でのコミューナルな記述に内容的に反証しながらも、一面的な批判・否定に陥らず価値中立を保とうとしている。政治的に扱いが難しい問題についてはあえて言及しないという方法は、たとえヒンドゥー・ナショナリズムであっても思想としてはひとつの価値であって、その点では批判しない／できないという姿勢か（「自問自答的な文章」「『中庸的』な叙述があいまさを生んで」〔栗屋 2012: 193〕もいる）。これはインドのセキュラリズムの性質として言われる、諸宗教への中立とも通じる。

歴史観については、A では古代＝ヒンドゥーの黄金時代とする姿勢はよくあらわれている（インダス文明やバラモン教の卓越、パルダー・サティーなど）、ムスリムは、中世は「侵入者」で、独立時には分離主義で出て行った、と捉えられる。B では、古代のバラモンによる不可触民差別の存在に触れ、中世のムスリムについて、「新しい宗教が現れた」、独立時にも最初からの分離主義ではなかったと丁寧に分離への過程を追ひ、さらにカースト差別や地域主義による国内問題について触れ、ヒンドゥーであっても一枚岩ではないことを示す。古代—中世—近代でヒンドゥー・ムスリムに関する時代の優越はないが、近代の植民地主義批判は明らか。

憲法でセキュラー国家と規定しても、A のような教科書が実際に出了という事実、インドの公教育はいかに政治的影響下にあつて、また歴史観も状況により変化しうるか。この先別の政権（例えば BSP）が誕生した場合、異なる公的な歴史教科書／観が誕生する可能性もある。

<参照教科書>

India and the World for Class VI, 2002, NCERT New Delhi

India and the World for Class VII, 2003, NCERT New Delhi

Contemporary India for Class IX, 2002, NCERT New Delhi

Our Past-I textbook in history for Class VI, 2006, NCERT New Delhi

Our Past-II textbook in history for Class VII, 2007, NCERT New Delhi

Our Past-III part 1 textbook in history for Class VIII, 2008, NCERT New Delhi

Our Past-III part 2 textbook in history for Class VIII, 2008, NCERT New Delhi

<参考文献>

栗屋利江 2004 「インドにおける歴史教科書論争をめぐって」、『歴史と地理 世界史の研究』第574号、pp.1-16

2010 「歴史研究／叙述に賭けられるもの—実証と表象の隘路を越えて—」『南アジア研究』第22号、pp.185-196

内藤雅雄 2004 「インドにおける歴史研究と歴史教育——インド人民党支配下での歴史教科書問題」『専修史学』第37号、pp.1-27

Habib, Irfan et al. 2003 *History in the New NCERT Text Books...A Report and an Index of Errors*, Indian History Congress, Kolkata

Lall, Mall 2009 *Globalization and the Fundamentalization of Curricula, Lesson from India*, in Lall, Mall and Vickers, Edward ed. *Education as a Political tool in Asia*, Routledge, London, UK

Thapal, Romila 2007 *Secularism, History and Contemporary Politics in India* in Needham, A.N. and Rajan, R.S.(edit,) *The Crisis of Secularism in India*, pp.191-207

謝辞

本発表で使用した BJP 政権期の教科書や関連資料は、栗屋利江先生から拝借いたしました。この場を借りてお礼申し上げます。